

15. 黄斑部疾患の手術成績

越谷病院 眼科

今井康雄, 忍田栄紀, 松本行弘, 筑田 眞

【目的】獨協医科大学越谷病院および関連施設において、特発性黄斑前膜 (ERM) および特発性黄斑円孔 (MH) に対して硝子体手術を施行し、その手術成績について様々な角度から検討したので報告する。

【対象と方法】2002年8月から2008年3月までの間に、獨協医科大学越谷病院および関連施設にて手術を施行し、3ヶ月以上経過観察できたERM患者53名53眼、男性19眼、女性34眼、MH患者71名71眼、男性30眼、女性41眼であり、20ゲージ硝子体手術システムにおける手術が83眼、25ゲージ硝子体手術システムにおける手術が41眼で合計124眼の手術について検討した。

【結果】当院および関連施設での黄斑疾患に対する硝子体手術の術後成績は良好であり、両疾患とも20ゲージシステムに比べて、25ゲージシステムにおいて早期からの視力改善を認め、術後3ヶ月の視力は良好であった。術中術後の合併症に関しても20ゲージシステムと25ゲージシステムにおいて差はなかった。MHのstageによる視力予後の検討では、stage II, IIIに比べ、stage IVでの視力予後が不良だった。ERMにおいてILM peelingの有無で予後に有意な差はなく、MHにおいてILM peeling時の補助物質は、ICG使用群に比べTA使用群で良好であった。

【結論】ERM, MHの黄斑疾患の手術は安全かつ有効に行われている。なかでも25G硝子体手術システムはERM, MHなどの黄斑部手術には、安全で有用と考えられる。

17. アレルギー性気道炎症に対するカンナビノイド合成アゴニスト (WIN 55,212-2) の抑制効果

小児科学

福田啓伸, 吉原重美, 阿部利夫, 有阪 治

【目的】

末梢神経において、カプサイシンやタバコ煙などの非特異的刺激が気道無髄知覚神経C線維を活性化し、その神経末端から放出される神経ペプチドが引き起こす神経原性炎症をカンナビノイド合成アゴニスト (WIN 55,212-2: WIN) が抑制することをすでに報告した。そこで今回、WINが新しい喘息の気道炎症抑制薬となるか否かについて、モルモット喘息モデルを用いて、喘息の基本病態であるI型アレルギー性気道炎症に対して検討した。

【対象と方法】

Hartley系雄性モルモットを使用し、気管OVA吸入誘発気道血漿漏出反応を検討した。

- ①カンナビノイド受容体アゴニストであるWINを用いて、気道アレルギー性炎症に対する用量依存性の抑制効果を検討した。
- ②WINによる気道アレルギー性炎症の抑制が、カンナビノイド1 (CB1) 受容体およびカンナビノイド2 (CB2) 受容体のどちらを介して作用しているかを、CB1受容体アンタゴニスト (SR141716A), CB2受容体アンタゴニスト (SR144528) を用いて検討した。
- ③既知のSPと親和性の高いNK1受容体アンタゴニスト (FK888) とWINの併用による抑制効果を比較検討した。

統計は、Tukey-Kramer multiple comparison testを用い、 $P < 0.05$ を有意とした。

【結果】

- ①WINは、アレルギー性気道炎症に対して、用量依存的に抑制効果を示した。
- ②WINによるアレルギー性気道炎症抑制効果は、CB2受容体アンタゴニストの前処置投与では阻害されたが、CB1受容体アンタゴニストの前処置投与では阻害されなかった。
- ③WINと既知のNK1受容体アンタゴニストの併用は、NK1受容体アンタゴニスト単独と比較して、アレルギー性気道炎症の有意な抑制効果を認めた。

【結論】

カンナビノイド合成アゴニストは気道知覚神経C線維のCB2受容体を介して、アレルギー性気道炎症を抑制した。また、既知のNK1受容体アンタゴニストと比較してより有意な抑制効果を認めた。さらに、ヒトにおいて同様の効果を示せば、新しい喘息の気道炎症薬となることが示唆された。